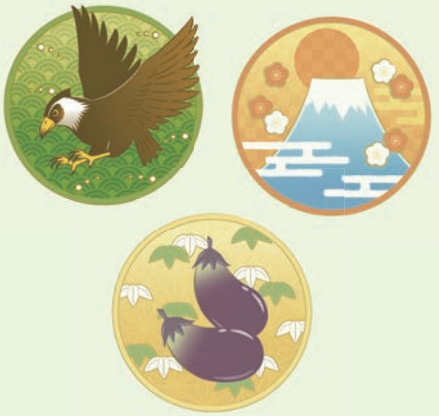
◇年頭挨拶◆

副病院長
烏野　隆博
（兼）臨床研修センター長・
血液内科主任部長

新年明けましておめでとうございます。昨年は日本だけでなく世界中に様々な出来事が目まぐるしく駆け巡りました。その最も大きな出来事はCOVID-19であります。りんくう総合医療センターでは、その対策において地域の先生方の御協力のもと、病院一丸となって対応し立ち向かっていくことができました。ここに皆さまに対し深く感謝申し上げます。COVID-19のような難題にぶつかった時、小学校の恩師の〝初心忘るべからず〟という言葉を思い浮かべます。誰もが知っている言葉だと思いますが、室町時代に能を大成させた世阿弥が書いた『花鏡』という伝書に書かれている言葉だということを御存じの方は少ないのではないでしょうか。一般的には「初めの志を忘れてはならない」という言葉で使われていますが、世阿弥にとっての「初心」とは新しい事態に直面した時の対応の仕方、これまで経験したことのない試練や難題に直面した時、それを乗り越えていく考え方を意味しています。つまり〝初心忘るべからず〟とは試練に出会った時、どのように試練を乗り越えたか、その経験を忘れてはいけないということです。りんくう総合医療センターはこの泉州地域の基幹病院として、この地域で完結する医療を提供してきました。しかしその歴史の中で数々の局面があり、その時々に考えうる最善の方法で対処してきました。ここには〝初心忘るべからず〟の思いがあったのではないでしょうか。

ところで、昨年はほとんど季節の移ろいを感じなかったように思います。四季を感じる余裕もなく、時間だけが早く過ぎていきました。しかし、それでも地球は今日も回り、季節は移り変わり、また新しい明日がやって来ます。今年の干支は丑です。牛歩のごとく余裕を持ってゆっくり歩み、季節の移り変わりを感じながら、そして初心を忘れることなく多くの課題に対峙し、明るい未来に向かって歩んでいきたいと思います。



◇年頭挨拶◆

看護局次長
鈴木　千晶

コロナ禍の中、新しい年が明けました。「おめでとうございます」の挨拶が少し躊躇される環境での新年となりました。昨年早春から始まったコロナ対応、初期の頃は、未知のコロナウイルスに対する対応に右往左往で、心身共に職員が疲れてきている中、「医療従事者の方々へ」という心温まる手紙やメッセージ、数々のご寄付の品々から、また頑張ろうという気持ちや勇気を沢山いただきました。本当にありがたく多くの方々に支えられていることに感謝し、この場をお借りしまして、御礼申し上げます。

看護局では、2020年度スローガンに「一人ひとりが自己の強みを活かし、患者の立場になって看護を実践しよう」と掲げました。このスローガンのもとには、「看護で選ばれる病院作り」という目指すものがあります。その為には、「桜梅桃李」看護師一人ひとりが自分の置かれた場所・立場で自分らしく看護の力を発揮し、患者の立場に立って考え、看護を実践していくことが重要です。今年も患者さん一人ひとりの「その人らしく」、看護師一人ひとりも「自分らしく」を大切にし、看護にあたってほしいと考えています。

昨今、社会的にも精神面からくる体調不良での離職や児童生徒の不登校等増加しており、コロナ禍の中、自殺者も増加しているといった暗いニュースが多くなっています。三密を防ぐために社会的距離を取る、装着が当たり前となったマスクで相手が何を思っているのか、どう感じているのか表情からくみ取ることがわかりにくくなっています。患者さんからもマスクで誰が誰なのかわかりにくいといった声も聞かれます。そのわかりにくさがあるからこそ、しっかり目を見て対話することが、相手の立場に立って考える一策だと思います。「鬼滅の刃」のアニメが空前のブームとなっていますが、これも人間愛がテーマになっているようで、社会的距離をとることで希薄になりがちな人間関係に憂慮している人達の、これではいけないという警鐘なのかもしれないと思っています。これから、心の距離を埋めるために、どう動くのかが鍵となるのではないかと思います。看護局として、地域の中核病院として、選んでいただける病院として、今年もしっかり考えながら、前進していきたいと思っています。今年もどうぞよろしくお願い致します。